

## 金史良の二言語作品における表現の差異をめぐる考察 —「留置場에서만만나사나이〔留置場で会った男〕(朝鮮語)、「Q伯爵」(日本語)を中心に

高橋 梓

김사량의 이중언어작품에 나타난 표현의 차이에 대한 고찰  
—「留置場에서만만나사나이」(조선어), 「Q백작」(일본어)를 중심으로

다카하시 아즈사

### 요지

김사량은 1939년에 잡지 『문예수도』의 동인이 된 후, 일본에서 발행된 잡지에 수 많은 작품을 발표한 ‘일본어작가’로 알려져 있다. 그러나 알려진 바와는 달리, 김사량은 일본에서 일본어로 작품을 발표하던 시기에 조선어로도 작품을 발표했다. 본고는 당시 조선어로 씌어진 작품 중 하나인 「留置場에서만만나사나이」가 일본어로 발표된 「Q백작」과 같은 내용을 가진 이중언어작품이라는 점에 주목하여 조선어로 씌어진 「留置場에서만만나사나이」와 일본어로 씌어진 「Q백작」 사이에 나타난 언어적 표현의 차이를 논했다.

이 작품들중에는 조선 농민들이 만주로 이민가는 것을 슬퍼하는 ‘백작’의 고통을 인정하지 않으려고 하는, 이른바 ‘갱생(更生)(진향) 한 신문기자가 등장한다. 이러한 ‘갱생(진향)했다는 신문기자의 입장은 겉으로 보기엔 작가가 친일적인 조선인을 표현한 것으로 해석할 수 있다. 그러나 조선어 작품과 일본어 작품 사이의 표현적 차이를 면밀히 살펴보면 신문기자가 ‘백작’과 완전히 상반된 입장에 서 있는 것은 아니라는 점을 발견하게 된다. 그리고 조선어로 씌어진 작품에 나타난 ‘백작’의 대사에서는 일본어로 씌어진 작품과 달리 ‘우물거림’이 나타나 있다. 이러한 현상은 조선인이 제국 일본의 국민으로 주체화될 수밖에 없는 상황에서 느꼈을 흔들림과 망설임을 표현한 것이라고 해석할 수 있을 것이다.

## 目次

1. はじめに
2. 金史良の二言語著作—発表メディアと発表言語
3. 二作品に共通する内容
  - (1) 作品の概要と時代背景
  - (2) 「更生」(転向)と「国民」主体—朝鮮農民の「満

- 洲」移民をめぐる認識
4. 新聞記者の「更生」(転向)の揺れ—「伯爵」に対する態度をめぐる表現の差異の分析
5. 朝鮮農民の「満洲」移民をめぐる「光明」の揺れ—「伯爵」の台詞における表現の差異の分析
6. 結論

## 1. はじめに

本稿では、1930年代末から1940年代前半にかけて日本文壇で活動し「日本語作家」として知られている朝鮮人作家・金史良(1914～1950?年<sup>1)</sup>)が、同時期に日本語作品と同じ内容を扱った作品を朝鮮語で朝鮮の雑誌に発表したことに注目する。そして、植民地期の朝鮮人作家の日本語作品は、帝国日本の軍国主義的ファシズムを主体性なく反復し、日本文学に一方的に包摂されていたという理解を問い直すことを目指す。

朝鮮人作家の日本語作品は、1930年代から1940年代にかけて増えていった<sup>2)</sup>。これは、当時の時代状況と大きく関係していた。

周知のように、1937年7月に日中戦争が勃発し、アジア・太平洋戦争へと展開していく中で、帝国日本は植民地朝鮮の兵站基地化を図り、朝鮮人の日本人化の政策を推進していった<sup>3)</sup>。

このような状況は、当時のメディア状況にも影響を与えた。当時、日本語雑誌が多く創刊<sup>4)</sup>されていく反面、朝鮮語の新聞・雑誌は相次いで廃刊されていった。1940年8月に朝鮮語新聞『朝鮮日報』『東亜日報』が強制廃刊となり、1941年4月には朝鮮語雑誌『文章』(1939年2月創刊)と『人文評論』(1939年10月創刊)が総督府主導の雑誌統廃合により廃刊となった。また、1942年5月6日に国民総力運動指導委員会で決定された「国語普及運動要綱」では、「文化方面に対する方策」として「文学、映画、演劇、音楽方面に対して極力国語〔日本語—引用者〕使用を奨励すること」<sup>5)</sup>とされた。

朝鮮人作家が植民地期に日本語作品を発表したことは、解放直後に作家たち自身による自己批判<sup>6)</sup>が行わ

れて以降、朝鮮文学の「暗黒期」の産物として長い間タブー視されることになる。

この「暗黒期」の作品が注目を集めるようになるのは、韓国において民族—民衆文学論が展開された1970年代前後の時期であった。韓国では、植民地支配、朝鮮戦争による南北分断、軍事独裁政権など、韓国が置かれた被抑圧的状况に対する抵抗の運動として、1970年代前後に民族—民衆文学論が出現した<sup>7)</sup>。ここでは、植民地期の文学はいわゆる「親日文学」として注目を集める。「親日文学」をめぐり、最初に登場した体系的な研究として、林鍾国『親日文学論』(平和出版社、1966年)<sup>8)</sup>を挙げることができる。林は、朝鮮人作家の日本語作品について「主体的条件を喪失した盲目的事大主義的な日本礼賛と日本追従を内容とする文学」<sup>9)</sup>としながら、個々の作家が「親日」文化機構にそれぞれどのように関わっていたかを詳細に明らかにした。『親日文学論』では朝鮮人作家をめぐり、親日/反日、抵抗/協力の二分法でとらえる議論が展開された。

朝鮮人作家の日本語作品は、帝国日本の軍国主義的ファシズムの論理を主体性なく反復したものとしてとらえられてきたが、このような理解は金史良をめぐる評価にも関わるものである。

金史良は、1939年より保高德蔵主宰の文芸同人雑誌『文芸首都』に同人として参加して以降、日本文壇で本格的に作品を発表するようになる。そして『文芸首都』1939年10月号に掲載された小説「光の中に」が、1939年度下半期の芥川賞候補作になり『文芸春秋』(1940年3月)に再掲載されてから、日本文壇で注目を浴びた。その後金史良は、太平洋戦争勃発に伴う思想犯予防拘禁法により鎌倉警察署に拘禁され

(1941年12月9日)、翌年1月末に釈放された後、朝鮮に帰郷した。『文芸首都』の同人になってから朝鮮に帰郷するまでの時期(1939～1942年1月)にかけて、金史良は日本の雑誌に多くの作品を発表しており、それらの作品をまとめた二冊の作品集(金史良『光の中に』小山書店、1940年12月、金史良『故郷』甲鳥書林、1942年4月)も出版された。

金史良は、日本文壇において「朝鮮民族の生活の実態と、そこに内在する意識」<sup>10</sup>を描いた作品を発表し続けたことと、解放直前に中国の抗日地域に脱出したことから、一般的に「民族主義作家」<sup>11</sup>と理解されてきた。また金史良は、1943年8月に国民総力朝鮮連盟によって日本各地の海軍施設に派遣され<sup>12</sup>、その視察をもとに「海軍行」(『毎日新報』1943年10月10～23日)、「海への歌」(『毎日新報』1943年12月14日～1944年10月4日)を発表したが、これは「民族主義作家」の挫折としてとらえられてきた<sup>13</sup>。

近年では、朝鮮人作家の日本語作品が帝国日本の軍国主義的ファシズムを主体性なく反復した、という理解は問い直されつつある。韓国では、90年代から2000年代にかけて、文学研究を通して民族主義的言説が問い直される中で<sup>14</sup>、朝鮮人作家の日本語作品をめぐる様々な研究が行われるようになった。

ここで、朝鮮人作家の日本語作品を植民地の「国民文学」<sup>15</sup>としてとらえる尹大石の問題枠組みを見てみたい。

「国民文学」は、国家の枠組みが揺らぐ際に問われてきた。日中戦争が勃発し、アジア・太平洋戦争へと展開していく時期において、日本文壇では「国民」の再定義をめぐる「国民文学」論が議論された<sup>16</sup>。

朝鮮人作家の日本語作品を、帝国日本の軍国主義的ファシズムの論理が主体性なく反復されたものとしてとらえた林鍾国の議論に対し、尹大石は植民地朝鮮においても「国民文学」が問われ、さらにそれは日本における「国民文学」論をそのまま繰り返すものではなかったとする。尹は、朝鮮人作家の作品において、帝国日本において求められた「国民」の再定義が植民地

朝鮮の文脈で「再構成」<sup>17</sup>され、「ほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体」<sup>18</sup>が形成されたとした。そして尹は、これまで「親日文学」とされてきた1940年代前半期の朝鮮人作家の作品に見られる同化や協力をめぐる表現を問い直した。

尹の議論をふまえると、金史良の「親日」的な表現が目立つとされてきた作品も、植民地の「国民文学」という枠組みでとらえなおすことができると筆者は考える。

金史良の朝鮮語作品「留置場에서 만난 사나이」〔留置場で会った男〕(『文章』1941年2月)と、日本語作品「Q伯爵」(金史良第二作品集『故郷』甲鳥書林、1942年4月)は、同じ内容が扱われている作品である。二作品には、語り手の友人で、かつて「××事件」に関わり、留置場に拘留されていた「新聞記者」の「更生」(転向)が描かれた。さらに、結末部分においては語り手たちが「拳国一致の体制」を肯定する表現が見られる。このことから、先行研究の中には、これらの二作品について、金史良作品の中でも「親日」的な表現が目立つものとして論じるものもある<sup>19</sup>。

それに対し、「拳国一致の体制」を肯定的にとらえる語り手たちと対照的に描かれた登場人物「伯爵」に光を当てた近年の先行研究は、植民地朝鮮における「国民」主体の「再構成」の問題を捉え直した試みだといえる<sup>20</sup>。

本稿では、近年の先行研究の議論をふまえながら、朝鮮語作品「留置場で会った男」と日本語作品「Q伯爵」が、同じ内容を扱った二言語作品であるという点に注目する<sup>21</sup>。これらの二作品の発表言語と発表メディアに光を当て、朝鮮人作家の日本語作品をめぐる理解をとらえ直す議論をさらに深めたい。

植民地期の朝鮮人作家の二言語作品に注目した研究として、金允植、鄭百秀、白川豊の研究を挙げることができる<sup>22</sup>。

金允植は、植民地期の朝鮮人作家の文学領域をとらえ直す上で、朝鮮人作家の二言語創作に注目する。金は、1938年11月下旬、京城(ソウル)で「朝鮮文

化の将来」或は「文化に於ける内鮮一体の途はどこにあるか」<sup>23</sup>という議題のもと行われた、朝鮮知識人と日本知識人による座談会に注目する<sup>24</sup>。林房雄を中心に行われたこの座談会では、日本知識人の朝鮮文学への関心が示され、朝鮮人作家は日本語で創作すべきだと日本知識人によって主張される。日本知識人の主張に対し、朝鮮人作家は反対の意を示す。

金允植は、この座談会の議論を受けて朝鮮人作家による創作言語をめぐる議論が展開されたことに注目する。具体的には、朝鮮語創作の特権性を主張する立場(韓暁)、地方語としての朝鮮語の存在を認めながらも「国語」である日本語による創作を主張する立場(金龍濟)が指摘された。これらの立場に対し、金允植は朝鮮人作家の二言語創作を主張する立場(金史良、林和)に注目し、そこに「国民国家を超えたところで成される文学の領域」<sup>25</sup>が形成されたとした。

金允植の研究に対し、二言語作品を具体的に論じたものとして、鄭百秀の研究がある。鄭は、二言語で創作した朝鮮人作家の言語意識がテキストにどのように反映されているかを、二言語作品に見られる表現の差異を通して論じた。朝鮮語作品「留置場で会った男」と日本語作品「Q伯爵」については、題名や「更生」した新聞記者が留置場に拘留された期間をめぐる差異「두달[二ヶ月]」(「留置場で会った男」p. 294)／「三ヶ月」(「Q伯爵」p. 117)を指摘した。

二作品の題名である「留置場で会った男」と「Q伯爵」は、どちらも新聞記者が出会った男のことを示している。鄭は、朝鮮語作品の題名の「留置場で会った」という部分が、日本語作品の題名から消えたことに注目する。そして、「留置場」という言葉には国家権力による統制や監視という意味が含まれると共に、植民地朝鮮においては支配者の強圧に対する抵抗や支配者の価値体系の破壊という意味を持つと指摘する。鄭は、朝鮮語作品の題名の「留置場で会った」という部分が日本語作品の題名から消えたことについて、各言語システムで共有されているものが他の言語システムで同じように共有されるかどうかを判断しなければならない、二言語創作をする朝鮮人作家の言語意識があらわ

れていると論じた。

本稿では、二言語作品に見られる表現の差異を、どの言語(朝鮮語／日本語)でどのメディア(朝鮮語媒体／日本語媒体)に発表したかによって生じたものとして論じた鄭の分析枠組みを継承したい。しかし、二作品の内容にかかわる部分については、さらに論じる必要があると考える。

ここで、作品の内容を発言言語と発表メディアに関連づけて論じた、白川豊の研究に注目したい。

日本語作品を中心に発表していたことで知られる朝鮮人作家の中には、朝鮮語の新聞・雑誌にも作品を発表していた者もいた<sup>26</sup>。白川は、1940年前後に親日的な日本語作品を残したことで知られる李石薫(牧洋)と張赫宙が、朝鮮語作品も発表していたことに注目し、これらの作家をめぐる「親日作家」という単一的な理解を打破しようとした。

白川の分析で注目すべき点は、以下の二点である。第一に、張赫宙の日本語作品と朝鮮語作品において扱われている内容の違いが明らかにされた。日本語では多様な内容の作品を残した張赫宙だが、朝鮮語では恋愛話、朝鮮女性の半生を描いたものが多いことが指摘された。この白川の指摘から、朝鮮人作家はどの言語で何をどのメディアに発表するか選択していたことが考えられる。

第二に、同じ内容を扱った李石薫の作品が、違うメディア(朝鮮語媒体／日本語媒体)に発表された時に、表現の差異が生じることが指摘された。白川は、李石薫のいくつかの日本語作品を、朝鮮語作品が日本語で「改作」されたものとして注目する。そして、朝鮮語作品に対して、これらの日本語で「改作」された作品には、朝鮮の文化をめぐる説明が加筆されたり、時局迎合的な描写が目立つと指摘した。この白川の指摘から、朝鮮人作家が朝鮮語で発表する場合と、日本語で発表する場合には、それぞれ強調されるものが変わってくるということが考えられる。

それでは、同じ内容を扱った金史良の朝鮮語作品「留置場で会った男」と日本語作品「Q伯爵」が、違う言語(朝鮮語／日本語)で、違うメディア(朝鮮語媒体／

日本語媒体)に発表されたことは、どのように考えるべきか。「親日」的な表現が目立つものとされてきたこれらの作品を、二言語作品としてとらえ注目すると、新たな読みが可能になるのではないか。

本稿では、「留置場で会った男」と「Q伯爵」に見られる表現の差異を読み取り、それらが何を意味するかを考察する。

## 2. 金史良の二言語著作—発表メディアと発表言語

日本文壇で注目を集め、多くの作品を残した金史良は、朝鮮語でも創作していた。金史良は、渡日直前の時期と、佐賀高等学校に在学していた時期、つまり日

本文壇において本格的に作品を発表し始める前の時期に、朝鮮語で作品を発表していた<sup>27</sup>。また、上述したように、金史良は1943年8月に国民総力朝鮮連盟によって日本各地の海軍施設に派遣され、それらの視察をもとに朝鮮語で作品を発表した<sup>28</sup>。

ここでは金史良が日本文壇で多くの著作を発表していた時期に、朝鮮語による著作も発表していたことに注目したい。

次に掲げる表は、1939～1942年に発表された、金史良の朝鮮語著作を筆者がまとめたものである<sup>29</sup>。さらに、朝鮮語著作と同じ内容を扱った日本語著作(評論1篇、エッセイ3篇、小説2篇、紀行3篇)を併記した。これらの著作を、本稿では二言語著作と呼ぶことにする。

【表】金史良の朝鮮語著作及び同じ内容を扱った日本語著作(1939～1942年)

	朝鮮語著作	日本語著作	備 考
評 論	「劇研座의 春香伝 公演 을 보고 [劇研座の春香伝公演を見て]」『批判』1939年6月		
評 論	「『젤마니』의 世紀的 勝利 [「ゲルマニ」の世紀的勝利]」『朝鮮日報』1939年4月26日		
エッセイ	「北京往来」『博文』1939年8月	「エナメル靴の捕虜」『文芸首都』1939年9月	それぞれのエッセイに、異なるエピソードが挿入されている。
評 論	「朝鮮文学側面観(上)—露文学의 影響・知性의 貧困 [朝鮮文学側面観(上)—露文学の影響・知性の貧困]」 「朝鮮文学側面観(中)—語感尊重의 限界와 題材 [朝鮮文学側面観(中)—語感尊重の限界と題材]」 「朝鮮文学側面観(下)—漢字問題、觀察、教養其他」 『朝鮮日報』1939年10月4～6日	「朝鮮文学風月録」『文芸首都』1939年6月	どちらの評論においても、朝鮮文学をめぐる表記の問題(「正音と漢字」、題材の問題(「題材と内容」)が論じられているが、朝鮮語評論「朝鮮文学側面観」の方がより具体的な問題を扱っている。一方で、日本語評論「朝鮮文学風月録」では、朝鮮人作家の創作言語の問題についても論じられている。
評 論	「独逸의 愛國 文学 [ドイツの愛國文学]」『朝光』1939年10月		
エッセイ	「密航」『文章』1939年10月	「玄海灘密航」『文芸首都』1940年8月	構成については大きな違いは見られないが、表現の差異が見られる。
評 論	「独逸 大戦 文学 [ドイツ 大戦 文学]」『朝光』1939年11月		
小 説	「落照」『朝光』1940年2月～1941年1月		
紀 行	「婦郷記 一母 [婦郷記一土地]」『朝鮮日報』1940年2月29日～3月2日		
紀 行	「山家三時間」『三千里』1940年10月	「メンドレミの花—火田地帯を行く(一)」「部落民と薪の城—火田地帯を行く(二)」「村の酌婦たち—火田地帯を行く(三)」 『文芸首都』1941年3月～5月	朝鮮語の紀行「山家三時間」から、日本語の紀行「メンドレミの花」と「部落民と薪の城」が再構成されている。しかし「山家三時間」には、「村の酌婦たち」のエピソードは見られない。
エッセイ	「陽徳通信」『新時代』1941年1月	「山の神々」『文芸首都』1941年7月	「陽徳通信」に対し、「山の神々」には様々なエピソードが挿入されている。
小 説	「留置場에서 만난 사나이 [留置場で会った男]」『文章』1941年2月	「Q伯爵」金史良第二作品集『故郷』甲鳥書林、1942年4月	構成については大きな違いは見られないが、表現の差異が見られる。
対 談	「朝鮮文化問題에 對해서 翼賛會文化部長岸田国土金史良對談 本社主催 [朝鮮文化問題について 翼賛會文化部長岸田国土金史良對談 本社主催]」『朝光』1941年4月		
小 説	「치기미 [チギミ]」『三千里』1941年4月	「蟲」『新潮』1941年7月	表現の差異が見られるとともに、朝鮮語作品「チギミ」に対し、日本語作品「蟲」にはいくつかのエピソードが挿入されている。

これらの二言語著作の中には、構成が大きく異なるものもあるが、ほとんど同じ構成のものもある。しかし、二言語著作の間に表現の差異が見られる点では、共通している。

なぜ表現の差異が見られるかについては、以下の二つの点から説明できる。

第一に、作家が自身の朝鮮語著作を参照しながら日本語著作を書いた場合、また日本語著作を参照しながら朝鮮語著作を書いた場合に、それぞれの言語に当てはまらない表現を言い換えたことが考えられる。

第二に、違う言語(朝鮮語/日本語)で、違うメディア(朝鮮語媒体/日本語媒体)に著作を発表する際に、作家が表現を選んだことが考えられる。

これらの二点は完全に区別することはできないが、本稿では特に二点目の特徴に注目し、二言語作品に見られる表現の差異が何を意味するかを考察する。

ここで、金史良の日本語による評論「朝鮮文学風月録」(『文芸首都』1939年6月)と、朝鮮語による評論「朝鮮文学側面観(上)(中)(下)」(『朝鮮日報』1939年10月4~6日)に見られる表現の差異について考えてみたい。これらの評論は、朝鮮人作家に朝鮮文学のあり方について語りかけるものである。朝鮮語評論と日本語評論は、構成は大きく異なるが、論じている内容は共通する部分が多い<sup>30</sup>ため、本稿では二言語著作とみなす。

これらの二つの評論は、同じように朝鮮文学の現状を朝鮮人作家に語りかけながらも、それぞれ強調する部分が異なっている<sup>31</sup>。

日本語評論「朝鮮文学風月録」に対し、朝鮮語の新聞に発表された「朝鮮文学側面観」においては、創作をめぐる表記と題材の問題について、より具体的に論じられていた。一方で、日本の雑誌に発表された「朝鮮文学風月録」には、朝鮮人作家の創作言語について論じた部分がある。これは朝鮮語評論「朝鮮文学側面観」には見られない議論である。

金史良は、上述した座談会「朝鮮文化の将来」において、日本知識人が朝鮮語創作を否定した問題を取り上げ、朝鮮人作家が日本語で書く場合には「朝鮮の文

化や生活や人間をもつとひろい内地の読者層へ訴へ出るといふ動機」<sup>32</sup>が必要だとした。さらに、金史良は朝鮮人作家が日本語で創作することは肯定しながらも、朝鮮語による創作が否定されることについては「作家が自分の言葉を捨て、読者層からはなれるといふなら、それこそ朝鮮文化は三千年の歴史を停止するといふものであらう。この点、東京文化人も真面目に考へて貰ひたいのである」<sup>33</sup>とした。この評論における朝鮮人作家の創作言語をめぐる議論は、朝鮮人作家に語りかけるものであると同時に、日本の読者に対する呼びかけでもあった。

日本語評論「朝鮮文学風月録」と朝鮮語評論「朝鮮文学側面観」は、同じく朝鮮人作家に朝鮮文学の現状を語りかけるものでありながら、「朝鮮文学側面観」が朝鮮の読者を対象に書かれたのに対し、「朝鮮文学風月録」は日本の読者も対象としたため、扱う内容に差異が生じたと考えられる。

### 3. 二作品に共通する内容

#### (1) 作品の概要と時代背景

本稿で扱う「留置場で会った男」(『文章』1941年2月)と「Q伯爵」(金史良第二作品集『故郷』甲鳥書林、1942年4月)も、作品が発表された文脈は異なっている。朝鮮語作品「留置場で会った男」は、朝鮮の読者を対象とした雑誌『文章』の特集「創作三十四人集」<sup>34</sup>(1941年2月)の一篇として発表された。それに対し、日本語作品「Q伯爵」は、日本文壇で活躍する朝鮮人作家としての作品集、『故郷』(甲鳥書林、1942年4月)の中に収録された。

それでは、「留置場で会った男」と「Q伯爵」とはどのような作品で、二作品に見られる表現の差異は何を意味するだろうか。具体的な二作品の比較に入る前に、本節では二作品に共通する内容について論じる。二作品に共通する内容を論じる上で、筆者がまとめた作品の概要を提示する。以下、それぞれの初出作品<sup>35</sup>を参照し、引用は「」内で示した。そして/の前後で朝鮮語作品、日本語作品の表記を並べて示した。

### 【作品の概要】

東京の大学を卒業し、そのまま東京に留まっている朝鮮人の4人の男(「우리〔われわれ〕」(朝鮮語)／「われわれ」(日本語))は、年末の帰省のために同じ列車に乗っている。その途上で「われわれ」のうちの一人の男(新聞記者)が、3年前に自分が「××事件」に問われて東京の留置場に拘留された時に会った男の話を始める。

新聞記者が出会ったその男は、皆から「王伯爵」(朝鮮語)／「Q伯爵」(日本語)というあだ名で呼ばれていた(以下「伯爵」)。朝鮮の道知事の息子でありながら、ボロボロの服を身にまとい、また何の罪に問われて拘留されたか不明であり、そしてアナキストを自称した「伯爵」は、新聞記者に強烈な印象を与えた。しかし、突拍子もない振る舞いで留置場の空気を和ませた「伯爵」は、拘留者たちの間で人気が高かった。

2年前、「更生」した新聞記者は釈放され、故郷に帰るために列車に乗っていた。「満洲」<sup>36</sup>に移民する朝鮮の農民たちを多く乗せたその列車の中で、新聞記者は「伯爵」と偶然再会する。「伯爵」の身なりは整っており、留置場にいた頃と全く別人のようだった。しかし、「伯爵」は満洲へ移民する朝鮮の農民たちを見て号泣し、満洲に移民する農民たちと共に嘆くことができるから移民列車に乗っている時だけが幸せだと発言する。新聞記者は「伯爵」が留置場にいた時よりさらに異常になったと考える。そして、新聞記者は、農民たちは満洲に希望を求めて移民すると反論した。言い争いの末、「伯爵」は気絶し、新聞記者は誤ってその上に尻餅をついてしまう。新聞記者は気絶したまま目を覚まさない「伯爵」を、人で溢れる列車の中に置き去りにした。

新聞記者は、「伯爵」を置き去りにしたことに罪の意識を感じている。そして、今でも様々な人を見かけては「伯爵」ではないかと思っている。新聞記者は、今年の春にソウルで見かけた警防団の班長を「伯爵」ではないかと思ったと友人たちに告げた。すると語り手は、それが「伯爵」だったと断じ、「우리나라〔我が国〕」(朝鮮語)／「国家」(日本語)が挙国一致の

体制で邁進する中で、「伯爵」も生活の目標を得たとし、それに「われわれ」も同意する。

以上のように、この二作品は、語り手の友人である新聞記者が、かつて「××事件」に関わり、3年前に拘留された留置場で「伯爵」と出会い、2年前に列車の中で「伯爵」と再会したことを、語り手ら大学の同窓の友人たちに語るというものである。

ここで、以下の二つの出来事に注目したい。第一に、「伯爵」と新聞記者が満洲へ移民する朝鮮農民と同じ列車に乗り合わせたこと、第二に、新聞記者がソウルで警防団の防空演習を見かけたことである。これらの出来事は、それぞれ帝国日本の政策と関連している。

まず、満洲に移民する大勢の朝鮮農民が列車に乗っていたことについては、以下のような背景がある。1931年に満洲事変が起こり、1932年に満洲国が成立すると、本国日本への渡航制限に伴い、朝鮮人の満洲への移民が奨励されることになった(1934年10月30日閣議決定「朝鮮人移住対策要目」)。そして1937年以降、朝鮮人の労働力を満洲の「安全農村」に計画的に配置する計画的移民が開始され、1941年までには日本人開拓者数をはるかに上回る数の朝鮮人開拓者が満洲に移民した。

また、新聞記者が警防団の防空演習を見かけたことについては、以下のような背景がある。1939年1月24日、日本で勅令20号「警防団令」<sup>37</sup>が出された後、朝鮮では同年7月3日に「警防団令」<sup>38</sup>が出され、これまでの防護団が統合・再編され、警防団となった。

新聞記者と「伯爵」が満洲に移民する朝鮮農民と同じ列車に乗り合わせたことと、新聞記者がソウルで警防団の防空演習を見かけたことは、それぞれ1937年以降に朝鮮人の満洲への計画的移民が行われたことと、1939年に朝鮮で「警防団令」が出されたことと関連している。二作品は日中戦争が勃発しアジア・太平洋戦争へと展開していった時期、つまり金史良が日本文壇で作品を発表していた時期と同時代のことが描かれているものとして読むことができる。

## (2) 「更生」(転向)と「国民」主体—朝鮮農民の 「満洲」移民をめぐる認識

次に、二作品における「伯爵」と新聞記者の関係の変化に注目し、朝鮮農民が満洲に移民することが当時の文脈で何を意味するかをふまえたうえで、新聞記者の「更生」(転向)の論理を読み解いていく。

まず、3年前の回想に注目したい。同じ留置場に入れられた新聞記者と「伯爵」が言葉を交わす中で、「伯爵」はアナキストを自称する。そんな「伯爵」に、新聞記者が非常に驚いた様子が、以下のように描かれる。

그게 너머 엉뚱한 큰 소리였기 때문에 나는 필적 놀래며 옆에 술통 앞으로 미끄러져 내려가 오금을 펴지 못하였다. [それはとんでもなく大きな声だったため、私はびっくり仰天し、傍にあった酒樽の前にすべりこんで、膝を抱え込んでしまった] (「留置場で会った男」 p. 293)

それが余り頓狂な声だつたので、僕はびつくりして、傍の手洗場の前へ飛び下りてしやがんでしまつた位である。(「Q伯爵」 p. 115)

日中戦争勃発後に朝鮮人の転向が増加する中で<sup>39</sup>、社会主義運動は衰退していった。特にアナキスト系の運動は、1937年の時点で「その団体活動として見るべきものなし」<sup>40</sup>とされていた。社会主義運動が衰退していく中で、アナキストを自称する「伯爵」は、新聞記者の目には「異常한 사나이 [奇妙な男]」(「留置場で会った男」 p. 289)／「不思議な人」(「Q伯爵」 p. 107)と映った。

新聞記者は「伯爵」を「異常한 사나이 [奇妙な男]」／「不思議な人」とみなしていたが、3年前の回想において、新聞記者と「伯爵」は互いに声をかけ合うほど親しかった。また、新聞記者が書類送検され留置場を出る時には、「伯爵」が「우마꾸 아레요오 [ウマクヤレヨオ]」(「留置場で会った男」 p. 294)／「うまくやれよう！」(「Q伯爵」 p. 118)と叫んで見送った。よっ

て、3年前の二人は、作品の中で「伯爵」が述べているように、同じ留置場に入れられた「東京의 同志 [東京の同志]」(「留置場で会った男」 p. 296)／「東京의 同志」(「Q伯爵」 p. 122)だったといえる。

しかし、新聞記者と「伯爵」が2年前に再会した時には、二人の関係は変化した。朝鮮農民が満洲に移民することを嘆く「伯爵」に対し、新聞記者は「자네가 무슨말을하고 있는지 나는 통 중을 못잡겠네 [君が何を言っているのか、私には全然見当もつかない]」(「留置場で会った男」 p. 298)／「僕は君が何を云つてゐるのかちつとも分りやしない」(「Q伯爵」 p. 125)と言うようになる。

新聞記者は朝鮮農民が満洲に移民することについて、自身の「更生」(転向)と重ねあわせながら、以下のように発言する。

呪詛받을風水害로 말미아마 논 밭 집을 뭇땅 물에 떠워버리니 백성들이 이제부터 새로운 光明을 찾아 멀리 曠野로 出發함을 볼때 나는 더욱더욱 自己도 勇氣를 내어 更生치 않으면 안되겠다. 새로운 生命을 다시금 찾아 들이지 않으면 안되겠다고 맹세하는 것이었다. [呪われた風水害によって農地や家をすべて水に流された百姓たちが、これから新たな光明を求めて遠く広野へ出発するのを見て、私はもっと自分も勇気を出して更生しなければならない。新しい生命をもう一度求めなければならないと誓うのだった] (「留置場で会った男」 pp. 295-296)

呪ふべき風水害に田や畑や家を流したこれらの百姓達が、これから新しい光明を求めて遠い曠野へ向く姿を見るにつけ、いよいよ僕は自分も再び生れ出ねばならない、新しい生命力を取返して強く生きねばならぬと誓ふのだつた。(「Q伯爵」 p. 120)

それでは、なぜ新聞記者は自身の「更生」(転向)を意識する際に、朝鮮農民の満洲への移民を「光明」と認識するのだろうか。ここで、朝鮮人の満洲移民が促進された背景について、水野直樹の研究<sup>41</sup>をもとに

まとめた上で、朝鮮人の満洲移民とは当時の文脈でどのような意味を持ったかについて考えてみたい。

植民地支配にともない朝鮮農村が困窮し、多くの朝鮮農民が離農した。日本における資本主義の発展と帝国日本の支配圏の拡大にともない、日本での労働力の需要が増え、多くの朝鮮人労働者が日本に渡航し定着した。朝鮮人労働者の日本移住は、日本社会の中に様々な軋轢を生み、結果的に朝鮮人渡航者を管理・制限する措置がとられていった。1919年の三・一独立運動勃発直後に個々の渡航者を管理・制限する「旅行証明書」制度が設けられ(1922年廃止)、1925年からは就職口が確実でない者の連絡船乗船を抑制する「渡航阻止」が実施された。その後、1927年以降は、日本に渡航する際に所轄警察署で裏書をした戸籍謄本を必要とする「渡航証明書」制度がとられ、1929年以降は、日本から一時的に朝鮮に帰るためには警察署からの証明書の発給を受けなければならないという「帰郷証明書」制度がとられた<sup>42</sup>。

さらに、朝鮮農村における恐慌と、満洲国の成立を経て、日本政府は朝鮮人の渡航について、帝国全体にわたる対策を立てた。「朝鮮人移住対策要目」(1934年10月30日閣議決定)では「朝鮮内ニ於テ朝鮮人ヲ安住セシムル措置ヲ講スルコト」「朝鮮人ヲ満洲及北鮮ニ移住セシムル措置ヲ講スルコト」「朝鮮人ノ内地渡航ヲ一層減少スルコト」「内地ニ於ケル朝鮮人ノ指導向上及其ノ内地融和ヲ図ルコト」<sup>43</sup>の四項目が挙げられた。水野は、朝鮮人の内地渡航の制限と併せて、朝鮮での生活安定、窮民救済事業の実施、満洲や朝鮮北部への移住の促進が謳われたことについて、朝鮮人の日本への渡航の増加が帝国日本の政策に大きなインパクトを与えたことを指摘した<sup>44</sup>。

朝鮮人の満洲移民を推進する日本政府と朝鮮総督府に対し、満洲を支配する関東軍は、満洲で朝鮮人の抗日武装闘争が展開されていたことから、治安維持を理由に朝鮮人移民を抑制しようとした。1937年に総督府と関東軍の間で朝鮮人入植者を毎年一万戸以内にする取り決めがなされた後、「鮮満拓殖株式会社」(総督府が1936年9月に設立)によって、朝鮮人の労働力

を「安全農村」に計画的に配置する計画的移民が開始された。

水野は、自由移民の形態は原則的に統制され、朝鮮総督府の斡旋による集団移住へと変化した1937年から1941年までに、集団・集合・分散の三形態による朝鮮人開拓民2万6,648戸・10万7,813人が入植したことを、同時期の日本人開拓者数(2万6,685戸・7万6,133人)と照らし合わせ、満洲における朝鮮人移民が占める比率の高さを指摘した<sup>45</sup>。集団移住を経て、朝鮮人移住者が満洲における高い人口比率を占めたことについて、趙寛子は朝鮮人移住者が帝国日本の「拓殖事業を担う先発隊」<sup>46</sup>であったと表現する。

満洲への朝鮮人の計画的移民は、総督府の論理では「満洲国の統治竝に産業開発に貢献し、同時に朝鮮に於ける過剰人口の調整に資し、更には内地に於ける朝鮮人労働問題の解決に寄與するの極めて重要」<sup>47</sup>とされ、苦境にある朝鮮農民を救済するものとされた。さらにそこでは、これまで「不平分子」「不正業者」と悪評を受けていた満洲の朝鮮人が「立派な皇国臣民」であることが立証されたと説明された<sup>48</sup>。

「更生」(転向)した新聞記者が、朝鮮農民の満洲への移民に「光明」を見出すのは、このような総督府の論理を受容して繰り返すものように見える。ここで朝鮮知識人の満洲認識に注目しながら、新聞記者の「更生」(転向)の論理を読み解いてみたい。

趙寛子は、朝鮮知識人が「在満百万同胞の発展のために 朝鮮を訪問した張総理に呈する我らの書」(『三千里』1937年5月)<sup>49</sup>において、満洲における朝鮮人の地位向上を訴えたこと、また金東進「建国十年の満洲国と朝鮮人近況—朝鮮内資本の進出と人物の集散等」(『三千里』1940年10月)<sup>50</sup>において、満洲の人口の三位を占める朝鮮人が国境警備隊、間島特設部隊などで活躍することが誇らしげに書かれたことを取り上げた。そして、これらの評論に見られる議論について、朝鮮知識人が帝国日本の領域で自民族の「国民的地位」<sup>51</sup>の向上を狙うものであるとした。一方で、「国家の集団的な統制から離脱した生活者や抗日運動家、すなわち「不正業者」「不逞鮮人」は、当時の言説空

間では「在満朝鮮人問題の癩」と見なされていた」<sup>22</sup>ことを、趙は同時期の新聞記事<sup>23</sup>を取り上げながら指摘した。

新聞記者が朝鮮農民の満洲への移民を「光明」とし、自らの「更生」(転向)と重ねあわせたのは、帝国日本の「国民」であることを意識する際に、国民的地位の向上の場として満洲を認識したためだと考えられる。

#### 4. 新聞記者の「更生」(転向)の揺れ—「伯爵」に対する態度をめぐる表現の差異の分析

以下では、前節で論じてきた新聞記者と「伯爵」の関係の変化が二作品においてどのように描かれ、どのような意味を持つかについて、二作品に見られる表現の差異を通して論じる。

まず、2年前の再会における新聞記者の「伯爵」に対する態度に注目する。

上述したように、朝鮮農民が満洲に移民することを嘆く「伯爵」は、新聞記者の「更生」(転向)の論理では否定すべき存在としてとらえられた。それは、日本語作品「Q伯爵」において、新聞記者が「伯爵」について「かういふ人間こそ亡ぶべきだ」(p. 126)と断じている部分にあらわれている。その部分を含む、以下の二作品の引用部分を見てみたい。

나는 더욱 어쩔 줄을 몰랐다. 그러나 어쩐지 그의 일이 뜻없이 측은히 생각되어 나도 덩달아 같이 슬퍼하고 싶은 생각까지 들었다〔以下、下線部の強調は引用者による一引用者〕勿論 冷靜히 생각한다면 이런 불상한 사람이 어디 있을 것인가. 이런 사람이야말로 차츰 滅亡할 人間이라고 할 것이다.〔私はいよいよどうしたらいいかわからなかった。しかしなぜだろう、彼のことがわけもなく痛ましく思えて、私もつられて一緒に悲しがりたい考えにまで至った。もちろん冷静に考えるなら、こんな哀れな人がどこにいるだろうか。こんな人こそ、だんだんと滅亡する人間だといえよう〕(「留置場で会った男」p. 298)

僕はいよいよ困ってしまった。だが何だか彼のことが哀れに思はれて同情の念さへ覚えた。むろん、冷淡に考へれば、何といふ困つた男であらう。かういふ人間こそ亡ぶべきだと云はねばなるまい。(「Q伯爵」p. 126)

日本語作品の「かういふ人間こそ亡ぶべきだ」という描写は、朝鮮語作品では「이런 사람이야말로 차츰 滅亡할 人間〔こんな人こそ、だんだんと滅亡する人間〕」と表現されている。これらの「伯爵」をめぐる描写は、二作品において新聞記者の「伯爵」に対する否定的な態度が共通して描かれていることをあらわしている。

しかし、これらの表現を見てみると、日本語作品では「伯爵」は「亡ぶべきだ」と断じられているのに対し、朝鮮語作品では「伯爵」は「だんだんと滅亡する人間」であると、「伯爵」のような考えを持つ人はだんだん少なくなっていくという状況が説明されている。新聞記者の「伯爵」に対する否定的な態度をめぐる描写は二作品に共通するものだが、「伯爵」を否定する新聞記者の態度をめぐる描写には、二作品の間に表現の差異が見られる。

さらに、引用部分を見てみると、日本語作品の「同情の念さへ覚えた」という部分は、朝鮮語作品では「나도 덩달아 같이 슬퍼하고 싶은 생각까지 들었다〔私もつられて一緒に悲しがりたい考えにまで至った〕」と表現されている。

ここで、日本語作品において、朝鮮農民が満洲に移民することを悲しむ「伯爵」に新聞記者が「同情の念」を感じると描写された部分が、朝鮮語作品では「伯爵」と「一緒に悲しがりたい」と表現されたことに注目したい。この新聞記者の「一緒に悲しがりたい」という表現は、新聞記者が「伯爵」と一緒に朝鮮農民が満洲に移民することを悲しがりたい、ということの意味する。

板垣竜太は、1930年代の朝鮮農村の窮乏化を「植民地化にともなう朝鮮社会の疲弊の延長線上にあ」<sup>24</sup>るとし、1930年代の朝鮮の地域社会の様相を論じた。

「米騒動」(1918年)をきっかけに、1920年代、帝国日本は植民地朝鮮における産米増殖計画を進めた。朝鮮全体では米は増産したが、増産分以上の米が内地に流出したことで、各農家の自家消費分は減る一方だった。そして米価は下落し、植民地下で拡大した米作依存型の農業経営は大きな打撃を受けた。その結果、小作農家の割合は増え続け、自作農家は減った。

このような農村の窮乏は、大量の離村者を生み出した<sup>55</sup>。1929年の調査によると、離農者の多くは朝鮮内の商工業等で働き(73%)、17%は内地へ渡航し、2%は満洲へ渡り、5%は一家離散状態にあったという<sup>56</sup>。この調査は、都市に大量の離農者が流出したことを示している。都市への人口集中が工業人口を上回った結果、あふれ出た住民は土幕民の集落を形成し、また山に入り焼畑農業を行う火田民になり、社会問題となった。朝鮮社会において行き場がない者たちは、日本や満洲への移民を選ばざるをえなかった<sup>57</sup>。

二作品において「更生」(転向)した新聞記者が「伯爵」に対し否定的な態度を取るようになったことは、共通して見られる内容である。しかし「伯爵」を「亡ぶべき」者として断じることがめぐるには、二作品の間に表現の差異が見られ、新聞記者の「伯爵」に対する否定的な態度は揺れを含むものであった。

さらに朝鮮語作品では、朝鮮農民の満洲への移民を「伯爵」と「一緒に悲しがりたい」とする新聞記者の描写が見られる。これは、朝鮮の農民たちが移民せざるをえない状況を「更生」(転向)の論理で「光明」とすることをめぐる、新聞記者の迷いとして解釈することができる。

## 5. 朝鮮農民の「満洲」移民をめぐる「光明」の揺れ—「伯爵」の台詞における表現の差異の分析

次に、朝鮮農民が満洲に移民することを嘆く「伯爵」の台詞に注目する。

二作品における新聞記者と「伯爵」の台詞の前後には、新聞記者と「伯爵」の台詞をめぐる描写が見られる。

新聞記者をめぐるには「그를 타일르듯이 조용히 달래었다」[彼に言い聞かせるように静かになだめた] (「留置場で会った男」 p. 297) / 「彼をいたはるやうに物静かに云つた」 (「Q伯爵」 p. 122) と描写された。二作品では、新聞記者の物静かに語る様子が描かれている。

それに対し、「伯爵」の描写は対照的である。

아무 꺼리낌 없이 닷자로 부르지졌다 [誰にも遠慮することなくむやみに叫んだ] (「留置場で会った男」 p. 296)

あたりかまはず大きな声で唸つた (「Q伯爵」 p. 122)

아주 미치기라도한 사람 모양으로 에헤헤 에헤헤 웃어 대었다 [すっかり狂った人のように、エヘエヘと激しく笑った] (「留置場で会った男」 p. 297)

まるで気でもふれたやうにえへ、えへと齒をむき出して嗤つた (「Q伯爵」 p. 123)

갑자기 비鳴과같은 소리를 짹 질르더니 그는 뒤로 움쳐 든다 [急に悲鳴のような声をあげ、彼は後ろにすくみ上がった] (「留置場で会った男」 pp. 297-298)

突然悲鳴のやうなものを上げてのけぞつた (「Q伯爵」 p. 124)

다시 괴로운 소리를 내며呻吟하였다 [再び苦しそうな声を出し、呻いた] (「留置場で会った男」 p. 298)

再び苦しうに呻いた (「Q伯爵」 p. 125)

以上の部分を見てみると、二作品における「伯爵」をめぐる描写には、叫び、笑い声、悲鳴、呻きなど、声に関連した表現が目立つことがわかる。

しかし、以下の「伯爵」の台詞に見られる二作品の表現の差異からは、他の部分の「伯爵」の台詞をめぐる描写とは違う特徴を読み取ることができる。

(1)

아니 그 그…… [いや、その、その……] (「留置場で会った男」 p. 298)

いや、さうだ (「Q 伯爵」 p. 125)

(2)

그게야 아무러문 어때 나는 그냥 그들과 같은 차로 같은 방향으로 간다는것만이 기뻐 죽겠어 그리구 같이 울기두하구 부르짖는것두 함께 한다는것이 그러나 어떻게까 나는 어떻게까 이 사람들이 國境을 넘어 서면 나는 혼자서 되집히 오지않으면 안되니 나는 그때 생각을하면…… [それはどうでもいい。僕はただ彼らと同じ列車で同じ方向に行くことだけが嬉しくてしかたない。それと、一緒に泣いて、一緒に叫んだりするのが。だけど、どうしよう、僕はどうしたらいいんだ、この人たちが国境を越えたら僕は一人で引き返さなければならぬ、僕はその時のことを考えると……] (「留置場で会った男」 p. 298)

それはどうでもええ、僕にはただ彼等が同じ車で同じ方向に進んで行くといふのが、嬉しくてならねえんだよ。そして泣くのも一緒によ、喚くのも一緒によ。だが僕はどうしよう。僕はどうしよう。この人達が国境を越えてしまふと、一人で引返さねばならねえんだ。その時を思ふと悲しくてならねえ (「Q 伯爵」 pp. 125-126)

(1) の台詞は、朝鮮農民が満洲に移民することを嘆き続ける「伯爵」の言動を理解できない新聞記者が「大體 어떻게 된 셈인가 [一体どうしたというんだ]」(「留置場で会った男」 p. 298) / 「一体どうしたと云ふのだね」(「Q 伯爵」 p. 125) と書いた際に、「伯爵」が答えたものである。

(2) の台詞は、新聞記者に「하나 이 사람들은 希望을 부들고 가는것이지 슬퍼하러 가는것은 아닐텐데 [だがこの人たちは希望を掴んだから行くんだ。悲し

むために行くのではないはずなのに]」(「留置場で会った男」 p. 298) / 「だがこの人達には希望がある。悲しむために行くのではない」(「Q 伯爵」 p. 125) と言われ、「伯爵」が反論したものである。

日本語作品「Q 伯爵」では、「いや、さうだ」「悲しくてならねえ」と、「伯爵」がはっきり答えるように描写されている。この台詞において、「伯爵」は自身の言動や、朝鮮農民が満洲に移民することを悲しむことを断定している。この「伯爵」の台詞に見られる断定の表現は、新聞記者と「伯爵」の2年前の関係の変化をあらわすものとして読むことができる。

しかし、他方で、朝鮮語作品「留置場で会った男」では、日本語作品の「伯爵」の台詞の「さうだ」「悲しくてならねえ」という断定の表現の部分に、「……」が挿入されている。「伯爵」の言動が理解できない新聞記者に「一体どうしたというんだ」と問われた「伯爵」は、「いや、その、その……」と口ごもる。また、農民たちが満洲に移民することを「だがこの人たちは希望を掴んだから行くんだ。悲しむために行くのではないはずなのに」と言われた「伯爵」は、新聞記者に反論しながらも「その時のことを考えると……」と口ごもる。この部分には、日本語作品の「伯爵」の台詞に見られるような断定の表現は見られない。

それでは、朝鮮語作品の「伯爵」の台詞における「……」の挿入(口ごもり)から何を読み取ることができるだろうか。

ここで、二作品における、満洲に移民する朝鮮農民をめぐる描写に注目したい。

第一に、新聞記者と「伯爵」が再会した場面では「모두들 무던히 疲困한듯 沈沈히 잠이 들어 누구하나 까막하는 氣色이 보히지 않았다 [皆とても疲れており、どんよりと眠っていて、誰一人目を覚ます気配もなかった]」(「留置場で会った男」 p. 295) / 「皆は非常に疲れてゐるらしく、昏々として誰一人目をさまさうとはしないのだつた」(「Q 伯爵」 p. 119) と、農民たちの疲労が描かれる。

次に、農民たちの悲しみが描かれる。農民たちは疲れて眠っていたが、列車が発車する時には「一齊히

慟哭과 喚聲이 天動하듯 일어났다. 서로 멀리 離別할 瞬間이 되자 모두 울음통이 터진 것이다 [一斉に慟哭と喚聲が天を動かすように起こった。互いに遠く離れる瞬間になると、皆泣き袋が爆発したようだ] (「留置場で会った男」 p. 297) / 「一斉に慟哭や叫喚の聲が動天地鳴りするやうに湧き上った。別れの刹那になると感極まつたのだ」 (「Q伯爵」 pp. 122-123) と描写された。

さらに、農民たちの悲しみをめぐる描写は、茫然へと変化する。列車の中で、朝鮮農民が満洲に移民することを嘆き続ける「伯爵」を、朝鮮農民たちが「茫然한 態度 [茫然とした態度]」 (「留置場で会った男」 p. 297) / 「ぼんやりとした放心の態」 (「Q伯爵」 p. 123) で眺める様子が描かれる。

上述したように、貧窮し土地を追われた朝鮮の農民たちは、離農し、火田民や土幕民になるか、満洲や日本に移民せざるをえなかった。朝鮮農村の人びとにとって「内地」や「満洲」のできごとは、まさに近所のできごとであり、自分の問題でもあった<sup>8)</sup>。

それでは、朝鮮農民が満洲に移民することを悲しむ「伯爵」は、朝鮮農民と同じ立場にあったといえるだろうか。二作品における、満洲に移民する朝鮮農民をめぐる描写を併せて見てみると、「伯爵」が朝鮮農民の満洲への移民を嘆き続けているのに対し、朝鮮農民をめぐる描写には悲しみの他に、疲労、茫然という描写が存在する。これは貧窮した農民たちが不安を抱えながらも、移民せざるをえない状況をあらわしている。

朝鮮語作品において、「伯爵」が自身の振る舞いを新聞記者に問われた際、そして朝鮮農民の満洲への移民を悲しむ際に口ごもったのは、「伯爵」が満洲に移民する朝鮮農民に寄り添おうとしても寄り添いきれないために口ごもったものとして読めるのではないか。

二作品には、満洲へ移民することが「自分の問題」である朝鮮の農民と、朝鮮の農民が満洲へ移民することを嘆く「伯爵」、そして満洲に朝鮮農民が移民することを自らの「更生」(転向)と重ねあわせる新聞記者の立場の違いが描かれている。日本語作品では、「伯爵」の台詞において、自身の振る舞いや、農民たちが

満洲に移民することを悲しむことについて断定する表現が見られる。これは「伯爵」と新聞記者の2年前の関係の変化をあらわしている。

それに対し、朝鮮語作品の「伯爵」の台詞には、日本語作品の「伯爵」の台詞に見られた断定の表現の部分に「……」が挿入されていた。これは、自身の振る舞いや、朝鮮農民が満洲に移民することの悲しみについて「伯爵」が口ごもる様子として読むことができる。「伯爵」の口ごもりは、朝鮮農民が移民せざるをえない状況に寄り添おうとしても寄り添いきれない「伯爵」の立場を示している。それは同時に、農民が移民せざるをえない状況を考えると、朝鮮農民の満洲への移民を「光明」とすることはできないという「伯爵」の疑問を提示するものだと解釈できる。

## 6. 結論

本稿では、金史良の朝鮮語作品「留置場で会った男」と日本語作品「Q伯爵」について、違う言語で違うメディアに発表された二言語作品として注目し、二作品に見られる表現の差異が何を意味するのかを論じてきた。

二作品には、かつて同じ留置場に拘留された「東京の同志」であった新聞記者と「伯爵」の関係の変化が描かれた。新聞記者は、朝鮮農民が満洲に移民することを「光明」とし、自身の「更生」(転向)の論理と重ねあわせる。満洲に朝鮮農民が移民することを悲しがる「伯爵」に新聞記者が否定的な態度を取ることは、帝国の軍国主義的イデオロギーを主体性なく繰り返したもののように見える。先行研究の中には、これらの二作品を、金史良作品の中で「親日」的な特徴が目立つものとして論じるものもあった。

しかし、これらの二作品に二言語作品として光を当てると、新聞記者の「更生」(転向)と「伯爵」の嘆きは、単に二人の対立をあらわすものではないことがわかる。

第一に、新聞記者の「伯爵」への態度に見られる表現の差異は、「更生」(転向)をめぐる新聞記者の迷い

として解釈できる。二作品では、新聞記者の「伯爵」に対する否定的な態度が描かれた。これは、朝鮮農民が満洲に移民することを「光明」とする新聞記者の「更生」(転向)の論理によるものだった。二作品に見られる新聞記者の「伯爵」に対する否定的な態度は、二人が完全に決別したもののようによく読むこともできる。しかし、二作品を比較すると、新聞記者の「伯爵」に対する態度には表現の差異が見られ、否定的な態度は揺れを含んでいた。さらに、朝鮮語作品では、新聞記者が朝鮮農民の満洲への移民を「光明」としながら、「伯爵」と「一緒に悲しがりたい」と描かれた。これは、新聞記者の「更生」(転向)をめぐる迷いとして読むことができる。

第二に、「伯爵」の台詞に見られる表現の差異は、朝鮮農民の満洲への移民が「光明」とされることをめぐる「伯爵」の疑問を提示するものとして解釈できる。

二作品の「伯爵」の台詞を見てみると、日本語作品では「さうだ」「悲しくてならねえ」と言い切っている部分に、朝鮮語作品では「……」が挿入されているものがある。日本語作品の「伯爵」の台詞では、自身の振る舞いについて「さうだ」と断定し、朝鮮農民が満洲に移民することを「悲しくてならねえ」と断定している。これは、「伯爵」と新聞記者の2年前の関係の変化をあらわすものとして解釈できる。

それに対し、朝鮮語作品の「伯爵」の台詞に見られる「……」の挿入は、自身の振る舞いや、朝鮮農民が満洲に移民することを悲しむことについて口ごもる「伯爵」の様子として読むことができる。この「伯爵」の口ごもりは、移民せざるをえない状況にある朝鮮農

民に寄り添おうとしても寄り添いきれない「伯爵」の立場をあらわしている。それは同時に、移民せざるをえない農民の状況を考えると、朝鮮農民の満洲への移民を「光明」とすることができないのではないかとという「伯爵」の疑問を示している。

これらの二作品の表現の差異からは、新聞記者の「更生」(転向)の迷いや、朝鮮農民が満洲に移民することを「光明」とすることへの「伯爵」の疑問を読みとることができる。さらに、ここで注目したいのは、新聞記者の迷いや、「伯爵」の疑問が、日本語作品と比べて、朝鮮語作品に強くあらわれていることである。

朝鮮語作品には「伯爵」に対する新聞記者の否定的な態度をめぐる揺れや、「伯爵」の台詞における「……」の挿入が見られた。それに対し、日本語作品では新聞記者が「伯爵」を否定すべき存在として断じる表現などが見られ、新聞記者と「伯爵」の対立がより強く示されたといえる。これは、帝国のメディアに日本語で作品を発表する際に、金史良が帝国日本の国策を意識しながら表現を選び直したものとしてとらえることができるのではないか。この点から金史良が帝国のメディアで作品を発表する際に感じたであろう緊張を垣間見ることができる。

本稿であつてきた二言語作品に見られる表現の差異は、朝鮮人作家が発表言語、発表メディア、読者の存在によって、作品の題材や表現を選択していたことを示しているといえよう。作品がどの言語で、どのメディアに発表されたかをふまえることで、「日本語作家」金史良の作品をめぐる新たな読みが可能になるのではないかと考える。

注釈

- 1 以下、金史良をめぐる年譜については、安宇植『評伝金史良』（草風館、1983年）に収録された「金史良年譜」を参照する。金史良は朝鮮戦争期に従軍作家として、朝鮮人民軍と共に南下した。1950年「10月より11月にかけて、アメリカ軍の仁川上陸に対応しておこなわれた朝鮮人民軍撤退のさい、持病の心臓病がもつて江原道原州付近で落伍、その後こんにちにいたるまで消息を絶っている。死亡したものと判断される」（安宇植、前掲書、p. 270）。
- 2 白川豊は、任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史』（法政大学出版局、1994年、p. 234）をもとに、朝鮮人作家の日本語作品数の変遷を、以下の表にまとめている。この表は、1930年代から1940年代にかけて、朝鮮人作家の日本語作品が多く発表されたことを示している。白川豊『植民地期朝鮮の作家と日本』大学教育出版、1995年、p. 19を参照。

年代/ジャンル	詩	小説・戯曲	評論・随筆	合計
1883～1929年	58篇	17篇	51篇	126篇
1930～1945年	146篇	129篇	229篇	504篇

- 3 具体的には「皇国臣民の誓詞」の制定（1937年10月）、陸軍特別志願兵令の施行（1938年4月）、第三次朝鮮教育令（1938年4月）による日本語教育の強化、創氏改名の実施（1940年2月）などを挙げることができる。
- 4 1930年代から1940年代にかけて創刊された日本語雑誌として『緑旗』（1936年1月）、『東洋之光』（1939年1月）、『国民新報』（1939年4月）、『内鮮一体』（1940年1月）、『国民詩歌』（1941年9月）、『国民文学』（1941年11月）などを挙げることができる。尹大石「『国民文学』の日本人小説家」（木村一信、崔在喆編『韓流百年の日本語文学』人文書院、2009年）を参照。
- 5 「国語普及運動要綱」は、『国民総力』1942年6月、p. 85（辛珠柏編『戦時体制下朝鮮総督府外郭団体資料集27』高麗書林、1997年、p. 247）、朝鮮総督府『朝鮮ノ国民総力運動』1943年3月、pp. 123-125（辛珠柏編『戦時体制下朝鮮総督府外郭団体資料集29』高麗書林、1997年、pp. 363-365）を参照。
- 6 「文学者の自己批判〔文学者の自己批判〕」『人民芸術』第2号、1946年10月。金南天・李泰俊・韓雪野・李箕永・金史良・李源朝・韓暁・林和など、解放後の民族文学建設運動を主導していた文学者が参加した。
- 7 民族－民衆文学論については、和田春樹・高崎宗司編『分断時代の民族文化－韓国《創作と批評》論文選』（社会思想社、1979年）、白楽晴著、安宇植監訳『韓国民衆文学論 白楽晴評論集』（三一書房、1982年）、金哲著、崔真碩訳『韓国の民族－民衆文学とファシズム 金芝河の場合』（『現代思想』2001年12月）を参照。
- 8 以下、林鍾国『親日文学論』は日本語版（林鍾国著、大村益夫訳『親日文学論』高麗書林、1976年）から引用する。
- 9 林鍾国、前掲書、p. 2。
- 10 安宇植、前掲書、p. 95。
- 11 安宇植、前掲書を参照。
- 12 「43年8月28日、海軍特別志願兵制度の実施にともない、在鮮文化関係者に内地海兵団・海軍諸学校その他の施設を視察させたのち、講演会・文学・絵画とで海軍思想を認識・普及させようとして、金史良・李無影・青木洪・兎玉金吾・尹喜淳・阿部一郎ら文人・画家を内地に派遣し、鎮海警備部・佐世保海兵団・海軍兵学校・海軍潜水学校・海軍省・土浦海軍航空隊等を見学させた」（林鍾国、前掲書、p. 109）。
- 13 安宇植、前掲書の「『太白山脈』から挫折へ」「挫折感と模索の日々」を参照。
- 14 雑誌『当代批評』（文富軾主幹、1997年9月～2005年2月、現在は休刊中）に発表された論文を参照。日本語に翻訳されたものは、金哲の前掲論文の他に、林志弦著、板垣竜太訳「朝鮮半島の民族主義と権力の言説 比較的問題提起（1）」（『現代思想』2000年6月）、金恩実著、中野宣子訳「民族言説と女性－文化、権力、主体に関する批判的読み方のために」（『思想』2000年8月）、金恩実著、中野宣子訳「韓国近代化プロジェクトの文化理論と家父長性」（『現代思想』2001年5月）、文富軾著、板垣竜太訳「『光州』20年後－歴史の記憶と人間の記憶」（『現代思想』2001年7月臨時増刊号）、尹海東著、藤井たけし訳「植民地認識の「グレーゾーン」－日帝下の「公共性」と規律権力」（『現代思想』2002年5月）がある。
- 15 植民地の「国民文学」をめぐる問題枠組みについては、尹大石『植民地国民文学論』（ヨクラク、2006年）、高橋梓「『反復』と『差異』－1940年代前半期における植民地の「国民文学」 尹大石『植民地国民文学論』

- を読む」(『Quadrante ～クアドランテ [四分儀] ～地域・文化・位置のための総合雑誌 Areas, Cultures and Positions』第15号、2013年3月)。
- 16 日本文壇における「国民文学」論については、三原芳秋「『国民文学』の問題」(『JunCture 超域的日本文学文化研究』第2号、2011年3月)を参照。
  - 17 尹大石、前掲書、p. 21。
  - 18 ホミ・K・バーバ著、本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局、2005年、p. 148。
  - 19 崔光錫「金史良文学에 나타난 親日性研究 [金史良文学에 아라われた 親日性研究]」(『日本語教育』第36号、2006年)。
  - 20 丁貴連「『余計者』という知識人と国家—金史良「留置場で会った男」と独歩「号外」(宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第50号、2001年)、宮崎靖士「非共約的な差異へむけた日本語文学のプロジェクト—一九四一—四二年の金史良作品」(『日本近代文学』第83号、2010年11月)、黄鎬徳「제국 일본과 번역 (없는) 정치—루쉰 룽잉쥙 김사량, '阿Q' 적 삶과 주권 [帝国日本と翻訳(なき)政治—魯迅・龍珠宗・金史良、'阿Q' 的生と主権]」(『大東文化研究』第63号、2008年9月)。
  - 21 金史良が二言語で発表した作品には、他に朝鮮語作品「지기미 [チギミ]」(『三千里』1941年4月)と日本語作品「蟲」(『新潮』1941年7月)がある。この二作品については、稿を改めて論じることとする。
  - 22 金允植「일제 말기 한국 작가의 일어 창작에 대하여 [日帝末期韩国作家の日本語創作について]」(『韓国学報』2003年春号。日本語版は、金允植著、白川豊訳「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題—解放前における朝鮮作家の日本語による創作について」『朝鮮学報』第186号、2003年1月。以下、本稿では日本語版から引用する)、鄭百秀「이중언어 작가의 언어의식과 소설 텍스트 [二重言語作家の言語意識と小説テキスト]」(鄭百秀『한국 근대의 식민지 체험과 이중언어 문학 [韓国近代の植民地体験と二重言語文学]』アジア文化社、2000年)、白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡 廉想渉、張赫宙とその文学』(勉誠出版、2008年)。
  - 23 「朝鮮文化の将来」『文学界』1939年1月、p. 271。
  - 24 この座談会は「朝鮮文化の将来と現在」(『京城日報』1938年11月29日～12月8日)、「朝鮮文化の将来」(『文学界』1939年1月)にそれぞれ掲載された。日本側の出席者は、辛島驍(京城帝国大学教授)・古川兼秀(総督府図書課長)・林房雄(小説家)・村山知義(小説家、座談会の前月に新協劇団によって行われた朝鮮の古典『春香伝』公演の演出担当)・張赫宙(小説家、『春香伝』を日本語に翻訳し脚色した)・秋田雨雀(劇作家)。朝鮮側の出席者は、鄭芝鎔(詩人)・林和(詩人、評論家)・兪鎮午(小説家、普成専門学校教授)・金文輯(評論家)・李泰俊(小説家、雑誌『文章』主宰)・柳致眞(劇作家)。
  - 25 金允植、前掲論文、p. 39。
  - 26 白川豊、前掲書の「第2編 二言語創作作家とその文学」における、「李石薫(牧洋) 作品考—二言語創作の一典型」「張赫宙の朝鮮語作品考」を参照。
  - 27 白川豊は、金史良の佐賀高等学校時代をめぐる調査を通して、金史良が渡日直前に21篇、佐賀高等学校時代に9篇の作品を朝鮮語で発表していたことを明らかにした。白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」(『朝鮮学報』第147号、1993年4月)を参照。
  - 28 金史良「海軍行」(『毎日新報』1943年10月10～23日)、金史良「海への歌」(『毎日新報』1943年12月14日～1944年10月4日)。
  - 29 この表は、それぞれの著作の初出を参照すると共に、金在湧・郭炯徳編『식민주의와 문화 총서 12 김사량, 작품과 연구 2 [植民主義と文化叢書 12 金史良、作品と研究 2]』(ヨクラク、2009年)を参照して作成した。
  - 30 日本語評論「朝鮮文学風月録」が雑誌に発表されたのに対し、朝鮮語評論「朝鮮文学側面観」は新聞に3回に分けて連載されたため、二つの評論は発表の形式も異なる。しかし、二つの評論の節の立て方には、共通点を多く見ることができる。日本語評論「朝鮮文学風月録」の節は「1. 偉大な作家出でよ、2. 内地語では書けない、3. 正音と漢字、4. 題材と内容、5. 翻訳クラブ」であり、朝鮮語評論「朝鮮文学側面観」の節は「1. 啓蒙文学、2. 知性文学、3. 純粋文学、4. 朝鮮文字と漢字、5. 題材と内容」である。特に、日本語評論の第3節と朝鮮語評論の第4節、日本語評論の第4節と朝鮮語評論の第5節は同じ名前の節であり、内容も類似する。
  - 31 この差異については、これらの評論が金史良全集に収録された際に指摘されていた。「『朝鮮文学風月録』朝

鮮の作家を語る」はいずれも当初より日本語で書かれたもので、したがって日本の読者を意識したせいも、朝鮮の作家ないしは作品にたいして、さほど批判がましい言辞は弄していない。ところがこれに反し、朝鮮語で書かれた「朝鮮文学側面観」では、かなり厳しい口調で作家もしくは作品にたいする批評をおこなっている(安宇植「解題」『金史良全集Ⅳ』河出書房新社、1973年、p. 370)。

- 32 金史良「朝鮮文学風月録」『文芸首都』1939年6月、p. 101。
- 33 金史良、前掲評論、p. 101。
- 34 朝鮮の文芸誌『文章』(1939年2月創刊～1941年4月廃刊)の特集。最初の創作特集号は「創作三十二人集」(1939年7月臨時増刊号)である。「創作三十四人集」は『文章』の創刊二周年を記念し企画された、二回目の創作特集号であった。
- 35 金史良「留置場에서만남사나이〔留置場で会った男〕」(『文章』1941年2月)、金史良「Q伯爵」(金史良第二作品集『故郷』甲鳥書林、1942年4月)。「留置場で会った男」の日本語訳は筆者が行った。また、「留置場で会った男」は、大村益夫・長璋吉・三枝壽勝編訳『朝鮮短篇小説選(下)』(岩波書店、1984年)に、大村益夫訳で収録されている。本稿で「留置場で会った男」を日本語訳するにあたり、表現や用語を確認する際に、この大村益夫訳を参照したことをここに記しておく。
- 36 戦前の日本では中国東北地方を「満洲」と呼んできた。本稿では、こうした歴史的呼称を用いるため、本来なら「」を付すべきであるが、繁雑のため本文中では「」は外して表記する。「満洲国」についても、同様に「」を省略する。
- 37 日本において出された「警防団令」の全文については、警防通信社『大日本警防誌』(警防通信社、1941年12月)を参照。
- 38 朝鮮において出された「警防団令」の全文については『朝鮮総督府官報』第3734号、1939年7月3日(『朝鮮総督府官報(巻121-130)』亜細亜文化社、1987年、p. 35)を参照。
- 39 朝鮮社会主義者の転向については、洪宗郁『戦時期朝鮮の転向者たち 帝国／植民地の統合と亀裂』(有志舎、2011年)を参照。
- 40 内務省警保局編『社会運動の状況(9)昭和12年』三一書房、1972年、p. 1073。
- 41 水野直樹「朝鮮人の国外移住と日本帝国」『岩波講座世界歴史19 移動と移民』岩波書店、1999年。
- 42 水野直樹、前掲論文、pp. 256-261を参照。
- 43 「朝鮮人移住対策要目」は、我部政男・広瀬順昭監修「国立公文書館所蔵公文別録86」(ゆまに書房、1997年)を参照。
- 44 水野直樹、前掲論文、p. 264。
- 45 水野直樹、前掲論文、p. 266。
- 46 趙寛子『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環 ナショナリズムと反復する植民地主義』有志社、2007年、p. 174。
- 47 朝鮮総督府『朝鮮事情』1941年、p. 287。
- 48 同前、p. 290。
- 49 崔麟・金東進・金三民・李晟煥・辛泰獄・朴榮喆・宋奉瑀・韓相龍・柳光烈・安熙濟「在滿百万同胞의發展을 爲하야 朝鮮에 온張總理에呈하는我等의書〔在滿百万同胞の發展のために 朝鮮を訪問した張總理に呈する我らの書〕」『三千里』1937年5月。
- 50 金東進「建国十年의滿洲国과朝鮮人近況—朝鮮内資本의進出과人物의集散等〔建国十年の満洲国と朝鮮人近況—朝鮮内資本の進出と人物の集散等〕」『三千里』1940年10月。
- 51 趙寛子、前掲書、p. 175。
- 52 趙寛子、前掲書、p. 175。
- 53 「不正業者五千名拔本塞源的彈压 在滿朝鮮人問題의癥〔不正業者五千名拔本塞源的彈压 在滿朝鮮人問題の癥〕」『朝鮮日報』1938年1月5日。
- 54 板垣竜太「朝鮮の地域社会と民衆」『岩波講座東アジア近現代史第5巻 新秩序の模索 1930年代』岩波書店、2011年、p. 243。以下、1930年代における農村の窮乏をめぐる記述は、板垣の論文を参照した。
- 55 板垣竜太、前掲論文、p. 243。
- 56 朝鮮総督府『朝鮮の小作慣習』1929年、pp. 40-41。
- 57 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、p. 33。
- 58 板垣竜太、前掲論文、p. 245。

参考文献（あいうえお順、\*は朝鮮語文献）

安宇植『評伝金史良』草風館、1983年

任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史』法政大学出版局、1994年

\* 林鍾国『親日文学論』平和出版社、1966年（日本語版：林鍾国著、大村益夫訳『親日文学論』高麗書林、1976年）

大村益夫・長璋吉・三枝壽勝編訳『朝鮮短篇小説選（下）』岩波書店、1984年

金史良『朝鮮文学風月録』『文芸首都』1939年6月

\* 金史良「朝鮮文学側面観（上）（中）（下）」『朝鮮日報』1939年10月4～6日

金史良『光の中に』小山書店、1940年12月

\* 金史良「留置場에서 만난 사나이〔留置場で会った男〕」『文章』1941年2月

金史良「Q伯爵」『故郷』甲鳥書林、1942年4月

金史良『故郷』甲鳥書林、1942年4月

『金史良全集Ⅳ』河出書房新社、1973年

\* 金在湧・郭炯徳編『식민주의와 문화 총서 12 김사량, 작품과 연구 2〔植民主義と文化叢書 12 金史良、作品と研究 2〕』ヨクラク、2009年

\* 金東進「建国十年의 滿洲国과 朝鮮人 近況—朝鮮内資本의 進出과 人物의 集散等〔建国十年の満洲国と朝鮮人近況—朝鮮内資本の進出と人物の集散等〕」『三千里』1940年10月

\* 金允植「일제 말기 한국 작가의 일어 창작에 대하여〔日帝末期韓國作家の日本語創作について〕」『韓國學報』2003年春号（日本語版：金允植著、白川豊訳「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題—解放前における朝鮮作家の日本語による創作について」『朝鮮學報』第186号、2003年1月）

白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」『朝鮮學報』第147号、1993年4月

白川豊『植民地期朝鮮の作家と日本』大学教育出版、1995年

白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡 廉想渉、張赫宙とその文学』勉誠出版、2008年

高橋梓「「反復」と「差異」—1940年代前半期における植民地の「国民文学」 尹大石『植民地国民文学論』を読む」『Quadrante ～クアドランテ [四分儀] ～地域・文化・位置のための総合雑誌 Areas, Cultures and Positions』第15号、2013年3月

\* 崔光錫「金史良文学에 나타난 親日性研究〔金史良文学にあらわれた親日性研究〕」『日本語教育』第36号、2006年

\* 崔麟・金東進・金三民・李晟煥・辛泰獄・朴榮喆・宋奉瑀・韓相龍・柳光烈・安熙濟「在滿百万同胞의 發展을 爲하야 朝鮮에 온 張總理에 呈하는 我等의 書〔在滿百万同胞の發展のために 朝鮮を訪問した張總理に呈する我らの書〕」『三千里』1937年5月

朝鮮總督府『朝鮮の小作慣習』1929年

朝鮮總督府『朝鮮事情』1941年

趙寛子『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環 ナショナリズムと反復する植民地主義』有志社、2007年

丁貴連「「余計者」という知識人と国家—金史良「留置場で会った男」と独歩「号外」 宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第50号、2001年

\* 鄭百秀『한국 근대의 식민지 체험과 이중언어 문학〔韓國近代の植民地体験と二重言語文学〕』アジア文化社、2000年

鄭百秀『コロニアリズムの超克—韓国近代文化における脱植民地化の道程』草風館、2007年

橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年

ホミ・K・バーバ著、本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局、2005年

\* 黄鎬徳「제국 일본과 번역(없는) 정치—루쉰 룽잉쥙 김사량, '阿Q' 적 삶과 주권〔帝国日本と翻訳(なき) 政治—魯迅・龍瑛宗・金史良、'阿Q'的の生と主権〕」『大東文化研究』第63号、2008年9月

洪宗郁「戰時期朝鮮の転向者たち 帝国／植民地の統合と亀裂」有志舎、2011年

水野直樹「朝鮮人の国外移住と日本帝国」『岩波講座世界歴史 19 移動と移民』岩波書店、1999年

三原芳秋「「国民文学」の問題」『JunCture 超域的日本文化研究』第2号、2011年3月

宮崎靖士「非共約的な差異へむけた日本語文学のプロジェクト—一九四一～四二年の金史良作品」『日本近代文学』第83号、2010年11月

\* 尹大石『植民地国民文学論』ヨクラク、2006年